

# 主 論 文 要 旨

No.1

| 報告番号                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          | 甲 乙 第 | 号 | 氏 名 | 森 祐亮 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|---|-----|------|
| 主 論 文 題 名：<br><br>哲学的解釈学と人間形成<br>——ギュンター・ブックと戦後ドイツ思想史の一断面——                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |       |   |     |      |
| (内容の要旨)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |       |   |     |      |
| <b>1.本研究の目的と構成</b><br>本研究の目的は、ギュンター・ブックの人間形成論を解釈学的人間形成として、教育哲学・教育思想史の視座から明らかにすることである。ハイデガーの弟子であり、哲学的解釈学の提唱者であるガダマーに学んだブックは、戦後ドイツという時空間において師の哲学的解釈学をはじめとする同時代の影響を受けつつ、独自の人間形成論を展開させた。本研究は教育哲学、教育思想史、そして解釈学研究の観点からブックを分析しつつ、以下の議論を扱った。すなわち、1. 現代においてもなお教育学の鍵概念とみなされる「人間形成」の概念の有効性、2. 戦後ドイツにおける保守派の思想の教育学における受容と展開、および可能性、3. ガダマーの哲学的解釈学と教育学の関係性の再考、である。ブックを参照枠組みとすることで、こうした議論に一定の回答を与えることを本研究では試みた。<br>本研究は「継承」「発展」「昇華」という III 部で構成される。これはブックのガダマーとの関係を意識して、このような形とした。ただし、本研究の意図はブックの思想を発展史的に読み解くことにはない。すなわち、ブックがある時期においてガダマーに忠実であり、そこから自らの思索を展開し、そして師のもとを離れる、という過程を描くものではない。ブックの思想にはむしろ、このようなガダマーへの異なる距離感が同時に内在しており、角度を変えれば見え方も変化するという、いわばプリズム的な要素がみられる。そのようなブックの思想を明らかにするための方法論的な観点として、本研究では上記の III 部構成を採用した。 |       |   |     |      |
| <b>2.本論の要約</b><br>第 I 部においては、ブックの人間形成論の土台となるガダマーの実践哲学と、それをブックがいかに受容したのかを明らかにした。第 1 章においてはガダマーの哲学的解釈学の実践哲学的展開を扱った。ハイデガーより「被投性」の概念を受け継いだガダマーはそれを「歴史性」へと彫琢し、自らの哲学的解釈学の中核に据える。そこから帰結する実践哲学的帰結は、アリストテレスとヘーゲルを媒介としつつ伝統や慣習の理性的な性格を強調するものである。こうした歴史性に棹さず解釈学的な実践哲学は、悪しき保守主義や伝統主義といった批判を呼び起こすことになる。こうした批判はブックの人間形成論にも当てはまるものであり、それにいかに対応するかは、本研究において戦後保守派の人間形成論と位置づけられるブック自身にも重要であることが本章では確認された。第 2 章においてはガダマーにみられる人間形成論の萌芽と、そのブックの学習論における受容を取り上げた。ガダマーは『真理と方法』において人間形成の概念を近代科学の真理観によっては捉えられない領域にあるものであると擁護する。ヴィーコ的な人文主義と 18 世紀、19 世紀的なドイツ精神科学の土壌となる伝統を連続的に捉えつつ、ヘーゲルに依拠することでガダマーは人間形成を精神の普遍性へと向かう運動と規定する。しかし、彼はそれを有限な                                                                                                   |       |   |     |      |

## 主 論 文 要 旨

No.

歴史のなかで絶えず行われる解釈学的経験とする点で、絶対精神を設定するヘーゲルと袂を分かち、ブックの学習も、基本的にはこのガダマーの解釈学的経験としての人間形成という構想を引き継いだ、解釈学的学習論と特徴づけられるものである。ブックは学習の可能性の条件を意識に常に先行する経験に求めた。ブックにおいて学習は白紙状態に新しいものが書き込まれるものではなく、常になんらかの仕方で臍に受け取られているものが徐々に明らかになっていく過程である。こうしたブックの学習もまた、ガダマーの言葉に倣えば歴史性をその可能性の条件としており、まさに解釈学的経験の一樣態である。ただし、こうしたブックの学習は知の拡大にとどまらず、学習者の地平そのものの変容を迫るものであるため、学習という次元を超え、人間形成の段階へと必然的に進むことになる。

続く第Ⅱ部においてはそのブックの人間形成論を扱った。ブックは古典的人間形成論を継承しつつも、同時にそこにガダマーの哲学的解釈学の軸を入れることでその更新を図る。こうした意図からブックは、コメニウスに代表される「客観的目的論」を歴史性を無視した前近代的な思考図式と退け、ルソーとドイツにおけるルソー主義に積極的な可能性を見出す。「同一性」という概念を人間形成概念に持ち込んだルソーだが、それを明白に人間形成の目的として定式化したのはシラーやヘーゲルに代表される、「ドイツのルソー主義者」と呼ぶ思想家たちであった。ブックはこうした思想家たちの「自らの同一性を普遍性に定位して形成する」という古典的人間形成論の基本的な図式を維持しつつ、そこにガダマーの歴史性を読み込むことで更新を図ったのである。第4章においては舞台をブックの生きた戦後ドイツに移すべく、ガダマーとハーバーマスの間で行われた「ガダマー／ハーバーマス論争」を教育学的に読み解くことを試みた。ハーバーマス等からすれば、ガダマーの歴史性を重視する立場は、伝統に潜む暴力性を覆い隠してしまう可能性がある。彼らは、社会科学はむしろ精神分析の手法をモデルとしつつ、そうした社会の病理としてのイデオロギーを暴かなければいけないと主張する。他方ガダマーからすれば、そのような役割を社会科学ないし精神科学に与えることは僭称である。なぜなら、そうした学問に従事する者たちもまた、歴史性からは等しく免れることはできない。それゆえ、社会に対して「専門家」として特権的な地位を要求することは、不当な僭称にほかならない。ガダマーはそうように反批判を繰り広げる。ブックの立場は、基本的に歴史性を重視する点においてはガダマーに近い。その一方で、その伝統に優位を認める原理を存在論的に基礎づけるガダマーと教育学者であるブックは少し距離を取る。むしろその点は、主体の権能を認める点においてハーバーマス等に少し歩み寄りつつ、伝統を支える原理としてブックはカントの主観的普遍性を介在させているのではないか、ということ本章では考察した。

第Ⅲ部においては、前章でも少し登場したカントとヘルバルトのブックによる解釈を取り上げた。ガダマーを媒介させつつもこの両者に対する解釈を通じて、哲学者であるガダマーと教育学者であるブックの違いは明らかになる。第5章においてはブックのカント解釈を取り上げた。カントの超越論的自由は自律に基づくが、それは同時に教育を不可能にする可能性を生じさせる。ガダマーはこのカントの厳密な二元論的倫理学を批判し、慣習に倫理的な意義を認める立場を採る。ブックはそれを引き受けつつも、カントとガダマーの両者の調停を自らの人間形成論において試みる。ブックはガダマーを引き受けつつ経験概念に改鑄を加え、経験における個別と普遍の混淆状態をその本質と捉える。その上で、カント以来その道徳的価値を引き下げられた「範例」の復権を試みる。ガダマーの歴史性を重視する立場を介在させつつも、ブックが採るのは極めて独特の戦法である。すなわちカントの『判断力批判』を倫理的に読み替えることで、ブックはカント自身によって道徳的価値を引き下げられた範例の復権を試みる。範例が『判断力批判』

## 主 論 文 要 旨

No.

における理想に、道德法則が理念に重ね合わせられることで、歴史的で経験的な概念である範例にも道德法則への道筋を認めようとする。このような形で、ブックは範例に歴史の内部で行われる他律から自律への移行の可能性を見出したのであった。こうした『判断力批判』の倫理的な読み替えは、同じくガダマーの弟子であり「実践哲学の復権」を担ったマンフレート・リーデルも行っており、いわば「ポスト・ガダマー世代」の特徴ではないかということも本章では示唆した。本論の最終章となる第6章においてはブックのヘルバルト論を主題とした。その際重要になるのが、彼の思想的背景となる戦後ドイツ保守派との関係である。戦後ドイツにおいてヨアヒム・リッターとその弟子のリッター学派を始めとする保守派はかなりの影響力をもっていたものの、フランクフルト学派の陰に隠れこれまであまり顧みられてこなかった。特に教育学においてはフランクフルト学派の流れを汲む「解放的教育学」の趨勢もあり、ほとんど戦後ドイツ保守派と教育学の親和性は論じられてこなかった。しかし、本章ではブックのヘルバルト解釈を通じて、彼が戦後保守派に親和的な教育学者であったことを明らかにした。まず、戦後ドイツ保守知識人が1978年に開いたシンポジウム「教育への勇気」に着目した。そこでは教育の社会改良への手段化、教育の科学的統制、教育目的としての解放などが糾弾され、文化的営みとしての教育の重要性が語られる。ブックのヘルバルト解釈は、まさにこうした観点から理解される必要がある。ブックは陶冶可能性の発揮の条件を文化的に規定されていることに見出す。つまり、理性的な可能性が現実の理性の堆積物と触媒されることによって、理性的な主体として立ち現れてくるのである。さらに、教育の自律への作用もこの原理から正当化される。すなわち、教育の正当性もこうした文化や伝統に内在する前反省的な理性に求められることになる。このような立場から最終的に、ヘルバルトの美学に教育学を基礎づけるという構想をブックはガダマーとカントを通じて再解釈することで、ブックの人間形成論は戦後ドイツという時空間において、理性と主体性の可能性を今一度見定めようとした試みであることを改めて示した。

本研究においてはこのように、ギュンター・ブックの思想を、ガダマーの哲学的解釈学の衣鉢を継いだ解釈学的人間形成論と位置づけつつ、歴史性を強調しながら戦後ドイツという時空間において理性と主体性の権能を徹底的に問い直したものとして明らかにした。本研究の結論としては、1. 教育哲学的には人間形成の有効範囲を、ブックが歴史性を介在させつつもなお、人文主義に基づく普遍性を目指した理念を保ちその可能性を探っていたこと、そして今日の教育哲学においてもその射程はなお色褪せないものであることが明らかになった。2. 解釈学研究としては、ハイデガー由来のガダマーの哲学的解釈学は従来教育学と相性がよいとはみられてこなかったものの、別の回路として人文主義と古典的人間形成論に接続する道を備えており、この点においてガダマー、ブックの解釈学的人間形成論はある意味古典的人間形成論の正当な末裔であることを示した。3. 教育思想史の観点としては、アリストテレスとヘーゲルを媒介させ、文化や伝統に理性的な可能性を求めるリッター派に代表される戦後保守派と教育学の積極的な結びつきの可能性を、ブックに基づいて提示した。さらに、ハイデガーの「現存在」がより具体的な「人間」へと変容していく、いわば「現存在の受肉化」とも言える事態が戦後ドイツの思潮の一部にみられるのではないかということを示唆した。ただし、これをより説得的に示すためには雑誌『詩学と解釈学』等を詳細に検討する必要がある、今後の課題としても位置づけられる。また、本研究においては保守派の可能性を論じてきたものの、その危うさについて十分に論じることはできなかった。これについては、今回扱った保守派より数世代前の、一時期ナチとも接近したハンス・フライヤーやカール・シュミットなどに着目することで、新たな視界が開けるはずである。保守派の積極的な可能性と功罪、そしてその教育思想への接続の可能性は今後の課題と言える。